

東亜同文書院大学から愛知大学へ

広島展示会・講演会

2014年10月21日(火) - 26日(日)
広島県立美術館 地下1階県民ギャラリー
第2展示室

開館時間 午前9時～午後5時
住所 広島市中区上幟町2-22

予約・入場無料

- ・JR広島駅より約1km、広島城より約400m
- ・市内路面電車・バス「縮景園前(しゅくけいえんまえ)」下車約20m
- ・駐車場完備(有料)

T E L (082) 221-6246

10月26日(日)

講演会

地下1階講堂

13:00-13:15 ごあいさつ
佐藤 元彦〔愛知大学学長〕

13:15-14:00 講演1
宮田 一郎〔東亜同文書院大学第41期・元NHKテレビ中国語講座講師〕
大衆の中で大衆に学ぶー母校・東亜同文書院を回顧する

14:15-15:00 講演2
三好 章〔愛知大学東亜同文書院大学記念センター長・現代中国学部教授〕
東亜同文書院の中国研究ー根岸信を例に

15:00-15:45 講演3
有森 茂生〔愛知大学法経学部卒〕
藤田 佳久〔愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェロー・名誉教授〕
東亜同文書院関係の史資料収集とコレクション紹介

東亜同文書院(のちに大学)は1901(明治34)年、東亜同文会によって中国上海に創立。国際社会に貢献する人材養成を目的に、戦前海外に設けられた日本の高等教育機関としては最も古い歴史をもち、約5,000名(広島県出身者202名)を輩出しました。

1945(昭和20)年、東亜同文書院大学は半世紀にわたる歴史の幕を閉じ、翌1946(昭和21)年11月、最後の学長であった本間喜一(愛知大学第二・四代学長)を中心に、愛知大学は創立されました。「世界文化と平和に寄与すべき新日本の建設に適する国際的教養と視野をもった人材の育成」を建学の趣旨に掲げた愛知大学にとって、東亜同文書院はその前身ともいべき存在です。

「東亜同文書院大学から愛知大学へ」広島展示会・講演会は、横浜、東京、弘前、福岡、神戸、シカゴ、京都、米沢、名古屋、富山、那覇、長崎、岐阜に続く14番目の開催です。

東亜同文書院大学本館／虹橋路校舍
(1917.4～1937.10)



お問い合わせ | 愛知大学東亜文書院大学記念センター

〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町 1-1 TEL 0532-47-4139 FAX 0532-47-4196

E-mail : Toa@ml.aichi-u.ac.jp

主催 | 愛知大学東亜同文書院大学記念センター 後援 | 中国新聞社／一般財団法人霞山会／公益財団法人愛知大学教育研究支援財団

愛知大学東亜同文書院大学記念センター／文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

ごあいさつ

本日は、広島における初めての愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催の展示会「東亜同文書院大学から愛知大学へ」にご来場頂き、誠にありがとうございます。

愛知大学は1946（昭和21）年、最後の旧制大学として愛知県豊橋市に誕生しました。その前身は東亜同文書院大学をはじめ、満洲の建国大学・台北帝国大学・京城帝国大学など、戦前日本の植民地・勢力圏にあった在外高等教育機関であり、その教員・学生が敗戦後日本に引き揚げ、設立した大学です。なかでも、1901年、近衛篤磨らによって清末の上海に設立された東亜同文書院（1939年大学昇格）が大きな比重を占めています。

東亜同文書院は日本本土だけでなく日本の植民地・勢力圏全域から優秀な学生を集め、ここ広島からも多数の学生が上海の地を踏みました。愛知大学は、そうした戦前の在外高等教育機関、中でも東亜同文書院大学を土台に創設された大学です。

「愛知大学設立趣意書」には、戦争への反省とともに「国際的教養を備えた人材の育成」・「地域への貢献」を大きな理念として掲げております。敗戦直後の混沌とした時代に、中部地方の一地方都市豊橋に誕生した愛知大学は、すでに当時から世界に向けて眼を開くとともに、大学の所在地を中心とする地域に対して学問・文化的に貢献するという姿勢を持っておりました。とりわけ、東亜同文書院大学の流れをくむ愛知大学の中国研究は、この東亜同文書院大学記念センターだけでなく、国際中国学研究センター（ICCS）などで全学で展開され、国際的にも注目を集めております。

日中関係が混迷する現在、東亜同文書院時代の中国研究の持つ現代的意義が見直されております。今回の展示でもそれにかかわる書院生の「卒業大旅行」の資料などをお目にかけられると思います。それ以外にも、1世紀を隔てた過去の東亜同文書院の中国研究は、未だに色あせることはありませんし、中国社会が転換期にある今、一層その光を放っている姿を今回の展示からかいま見ることができるとと思います。そこに端を発する愛知大学の中国研究は、歴史的蓄積を背景に、今後も世界的視野に立って展開されていくであらうでしょう。

ご来場の皆様に、東亜同文書院そして愛知大学の歴史から、何か琴線に触れるものをお感じ頂ければ、幸いです。

2014年10月21日
愛知大学東亜同文書院大学記念センター長
三好 章

東亜同文会 と その理念

1898（明治31）年に誕生し、1946（昭和21）年に自主解散するまで東京に存在した東亜同文会は、近衛篤磨（1863～1904年）を初代会長として成立しました。主に日中間の教育文化事業を担う団体として、40数年にわたり「南京同文書院」「東亜同文書院」の経営母体であり続けました。



近衛篤磨（1863～1904年）

近衛篤磨（このえあつまる）は幕末に五摂家筆頭の家柄に誕生、1885（明治18）年から1890年までドイツに留学し、政治や法律を学びました。帰国直後に帝国議会議院議員となり、さらに1896年には貴族院議長に就任し、当時の日本政界の重要人物の一人でした。

1894年に日清戦争が勃発し、翌年日本の勝利で終わると、日本では清国を蔑視する風潮が強くなり、また列強の清国における利権獲得競争は激しくなりました。こうしたなかであって、近衛は日本人の清国人に対する軽蔑の風潮を戒めるとともに、1898年に岡山県出身の白岩龍平をはじめ、中西正樹、井手三郎、大内暢三たちと「同文会」を結成しました。同文会は中国問題の研究と中国事業の実行を担い、各般の調査に従事することを目的としました。

一方、「同文会」誕生の前年には、日本に亡命してきた清朝改革派の康有為や梁啓超らを支援しようとするなど志士的気運が強く、犬養毅らが会員として参加する「東亜会」が結成されていました。やがて、同文会と東亜会は合併することとなり、1898年11月2日、「東亜同文会」が誕生したのです。近衛は東亜同文会の初代会長に就任しました。しかし、近衛は東亜同文会が政治団体になることを避けて、日中間の教育文化事業団体として性格づけました。

東亜同文会は綱領として「支那を保全す」、「支那及び朝鮮の改善を助成す」、「支那及び朝鮮の時事を討究し実行を期す」、「国論を喚起す」と定めました。また、趣意書には日清両国政府が邦交を固くし、両国の人々の相互友好を謳うとともに、知識人や指導者たちは互いに富強を目指すことを願って、東亜同文会を設立したと記しています。こうした綱領や趣意書に見られるような、列強の分割に反対する清国保全と日清提携が、近衛の信念でした。

やがて、これらを土台とした日清友好の実現を担う人材の育成機関として、「南京同文書院」が、そして後の「東亜同文書院」が誕生することとなるのです。

南京同文書院の 誕生と 広島県の対応



劉 坤一 (1830~1902)

1899 (明治32) 年4月から11月まで、近衛篤磨は欧米を中心とする海外視察の旅に出ました。その帰路、清国に到着した近衛は、上海から長江をさかのぼり南京に到着、10月29日に清朝高官で两江總督の地位にあった劉坤一と会見しました。会見の席で近衛は東亜同文会の趣旨とあわせて、南京に学校を設立する考えを述べ、万事に相当の便宜が与えられるよう依頼したところ、劉坤一から「できるだけの便宜を図りたい」と快諾の返事を得ました。

日本へ帰国した後の同年12月末、近衛は各府県知事・府県議会議長あてに南京同文書院への勧誘状を発送しました。そのなかでは南京同文書院設立の意義と教育内容が述べられるとともに、各府県から毎年2~3名以上の学生を派遣することが要望されていました。それに関する具体的内容は、①学費は1人につき年間240円の予算、②中学校 (旧制) 卒業者もしくはそれと同等以上の学力を有する者、という要望でした。

このうち、①学費については、例えば同時代の慶応義塾大学部の年間学費が36円 (『東京遊学案内』、1900年4月) だったことを踏まえれば、大変高額だったことが分かります。

しかしながら、近衛の各府県に対する学生勧誘は翌年度の予算確定後だったため、それに応じた県はほとんどありませんでした。そのなかで広島県は再度県議会を開催し、最初に県費留学生の派遣を決定しました。近衛は1900年5月に広島市で演説を行なった際、「誠に同文会前途の吉兆とも云ふべき次第なり」と述べ、その時の広島県の対応を高く評価しています。この動きは、翌年には全国の各府県へ広がりますが、その背景には日清戦争後、日本人に清国への関心の高まったことにあったといえます。

南京同文書院は1900年5月に開院式が行なわれました。学生は『沿革史』 (東亜同文書院学友会、1908年) によれば15名であり、このなかで広島県派遣生は御園生深造、谷原孝太郎の2名でした。ほかには熊本県派遣生3名、同県からの自費生1名、農商務省海外実務練習生2名、東亜同文会からの留学生5名、岡山県の豪商・野崎武吉郎の給費生2名という内訳でした。

一方、熊本県派遣生だった人物の後年の回想では、ほかにも8名がいたとのことでしたが、そのなかには佐賀県派遣生のほか、広島県派遣生として横山吏弓、谷口某もいたとされています。

近衛篤磨の広島訪問 1

広島・尾道両市の訪問と そのスケジュール

1900（明治33）年5月、東亜同文会会長・近衛篤磨は広島・尾道両市を訪問しました。同月16日に中西正樹、大内暢三を伴い東京を出発、名古屋、京都を経て19日夜に広島駅に到着しました。以降23日に尾道市を離れて帰京の途に着くまでの、近衛の主な足取りを見てみましょう。

- 19日 午後8時5分 広島着。江木千之（えぎかずゆき）知事以下数十名が出迎え。
- 20日 午前10時 伴資康（ばんすけゆき）市長らの案内で中学校に赴く。
教育倶楽部の大会開催中で、要請により教育に関する演説を行う。
午後2時すぎ 庭園・春和園に赴く。江木千之知事以下、書記官など来会者200余名。
300名。近衛ならびに中西正樹が演説を行う。
演説後、余興や宴あり、午後8時に帰寓。
- 21日 尾道に向け出発。杉山新十郎尾道市長、市会副議長、宇都宮胖蔵らが出迎えのため広島到着。
- 午前9時半 出発し広島駅へ。江木千之知事以下多くの人が見送る。
長沼支店で小息。
午前10時45分発車
午後1時過ぎ尾道到着。尾道到着後、ただちに橋本吉兵衛の別荘・
爽籟軒（そうらいけん）に入る。
午後3時半 杉山市長の案内で市役所へ。
近衛、中西、神輿知常（東亜同文会会員、京都より同行）らが演説し、
200名以上の聴衆あり。
濤声帆影楼での歓迎会に臨む。
午後8時半帰寓、さらに酒宴あり夜半におよぶ。
- 22日 橋本家にて「山陽耶馬溪図并記」、詠史楽府六十六関、施伝山水一幅など、
所蔵の書画を見る。
午後1時 大宝山の上にある千光寺に会場が設けられている、
尾道の実業青年会に赴く。
杉山新十郎市長、橋本吉兵衛らが来場、
要請に応じ近衛が演説を行う。
大内暢三（近衛篤磨の秘書。1930年代に
東亜同文書院院長・学長）も談話を行なう。
休息後下山、小舟で橋本吉兵衛所有の小歌島に渡り観光。
小歌島で浄土寺を参観。
橋本吉兵衛による近衛一行の招宴。

以上のスケジュールをこなした近衛篤磨とその一行は、23日午前10時に尾道駅を出発、岡山県、京都府、愛知県名古屋市を経て、6月4日東京に帰り着きました。

（近衛篤磨のスケジュールは『近衛篤磨日記』第3巻（広島研究所出版会、1968年）、『東亜同文会史』（霞山会、1988年）、江木千之の顕写真は『江木千之翁経歴説』（江木千之翁経歴説刊行会、1933年）より）



代時員臨臨典典親親出厚幹
（即 江木千之翁）

江木千之知事

近衛篤磨の広島訪問2

広島市・春和園での演説と 東亜同文会広島支部の結成

近衛篤磨が5月20日午後に広島市内の庭園・春和園で行った演説の趣旨は、次のようなものでした。

- ①日清戦争後、列強が中国内で利権獲得を進めることが、中国側に日本に対し親しむ気持ちを惹起させ、日本と結託する必要を悟るに至った。その機運に基づいて、日本は中国を開拓する必要がある。
- ②従来、三井物産会社などはすでに商店を中国内に設け、その他中国で商業を営む日本が多数あるが、これらは個別に活動してきたため脈絡が通じない点があった。したがって、東亜同文会の必要性も起こってきたのである。東亜同文会が団体として成功しようとするには、相譲相謀の策を執行して一致する運動を取ることに極めて便宜があると信じてもらうことである。つまり、各種事業の紹介者となり、中国人の信用を博することによって、永遠の大利益を獲得することを得るであろう。
- ③東亜同文会の決議は、(1)支那を保全す、(2)支那及朝鮮の改善を助成す、(3)支那及朝鮮の時事を討究し実行を期す、(4)国論を喚起す、というものである。まず第一の仕事は、中国人や朝鮮人を教育するとともに、日本人の中国通を養成することである。そのため、中国人・朝鮮人を教育するためにはその国の便宜の地に学校を設けてかの国の少年を育成、中年以上の者には新聞を興してその耳目を啓発させることを期する。
- ④中国や朝鮮にもすでに2、3の学校を設置しており、南京にも1つの学校を設けることを企てたが、南京総督劉坤一は有名な人物で東亜同文会の趣意に賛成され、各種の便宜を与えられた。南京に設置した学校は日本各府県より各種の人を派遣させようとする考えで、東亜同文会は各府県に通牒して県費生2、3名くらいを派遣することを求めた。しかし、昨年末に最初に県費留学生派遣を決定したのは広島県であり、東亜同文会の前途の吉兆というべき次第である。ついで熊本県も派遣の申込みがあった。
- ⑤私は1つの意見として、東亜同文書院に賛成する理由を開陳する。東亜同文会の事業は各種あり、賛成する人や賛成しようとする人の意見は色々ある。しかし、要するに中国や朝鮮を啓発して東洋の面目を保全するという大きな目的は1つである。この事業は政治問題と異なり、日本人の同意を得られるべき事柄である。各人の賛助を得ることを希望する。中国は大国であり、人情風俗の相違もはなはだしいものがある。また、各省の総督は日本の大名のようなもので、軍政や行政はことごとく異なっている。なので、欧米人がただちに中国内地に入ろうとしても様々な便宜を欠き、十分に働くことができない。一方、日本人は中国人と同種で漢字を使い、孔孟の教えを奉ずるので、交情においては他の人種よりも便宜と利益がある。現在、中国でイギリス、ドイツ、ロシア、フランスは割拠しているが、その内部における事業は、やはり同文同人種である日本人に帰することは見易い理である。
- ⑥近年、日本の人口の増加は大変なものである。10数年もしくは数十年後には非常に多くの人口となり、日本国内だけでは生活困難になる。居住だけではできず、どこからか食物を求める必要がある。今日においても日本人はハワイやアメリカ、南洋諸島に出稼ぎに行っているが、日本人排斥論が盛んになりつつあれば、前途安全とはいえない。しかし、無人の土地を発見することは空想であり、この救済策を講ずる必要がある。したがって、日本人は工業商業の発達を図り、吸収力を強大にすることが必要である。この原料の供給地は第一に中国から仰ぐにほかにない。これを再製して仕向ける得意先もまた中国とならざるを得ない。日本人は中国人と共同して仕事をするのも良からう。このようにして、日本人の得意先は中国や朝鮮にとどまらず、シベリア・南洋諸島・東インド諸島にまでおよぶであろう。その需要はすこぶる莫大なるものである。すなわち、日本人の無形の領地はいたるところに展開されつつあり、我々が来ることを待っている。日本人の前途は多望多事である。これが、東亜同文会第一の事業として、中国・朝鮮人を教育するとともに、本邦人の中に中国通を作ろうとする理由である。

近衛篤磨の広島訪問3

東亜同文会広島支部の結成

春和園で行なわれた近衛の演説を契機として、広島県の有志者のなかから東亜同文会支部を設置する動きが現れました。その結果、1900年5月には東亜同文会広島支部の趣意書と規則が定められ、その内容は以下のように記されていました。

【東亜同文会広島県支部会設立趣意書】

禹城(＜ママ＞)四百州雞林八道相隣して久しく国を建て我蜻蜒州東海の表に屹立し僅かに一葦(＜ママ＞)帯水を隔てて彼と相対すると茲に数千年三国文を同うし化を通じ実に唇齒輔車相依る可き公理あり彼我の士民和協して事に当らば俱に天賜を享け同じく盛強を底すべきなり是れ東亜同文会の起る所以にして吾人の大に賛同する所、而して今や洵に斯の旨義を拡張するの要を觀(み)る乃ち茲に支部会を設立聊か本会に向て弼助声援するところあらんとす冀くは県下同感諸士の戮力を煩わすこと得ん
明治三十三年五月

【東亜同文会広島県支部規則(抜粋)】

- 第一条 支部会は本会主意并に会則に基き設立す
- 第二条 支部会員は本会の主意を賛成し支部会に加盟したるものを以て組織す
- 第三条 支部会は広島市〔原文アキ〕に置く
- 第四条 支部会に左の役員を置く
支部会長一名 幹事三名 事務員一名 評議員七名
- 第五条 支部会長は支部を統轄し外に對して支部を代表す
支部総会及評議員会の議長は支部会長の任とす
- 第八条 評議員は評議員会を開き重要な会務を評決す
- 第九条 支部会長幹事及評議員は毎年秋季支部総会に於て選挙す
- 第十条 支部会を分て三とす
一 総会
総会は全員を会するものにして毎年秋季に之を開く
二 評議員会
評議員会は毎月一回之を開く
三 臨時会
臨時会は総会及評議會を臨時に開くものにして支部会長の意見若くは評議員三名以上又は会員十名以上の建議に依り之を開く
- 第十一条 会費は一ヶ月金二十五銭とす
- 第十二条 入会又は退会せんと欲する者は支部会長に届出づべし

(『東亜同文会史』霞山会、1988年、297～298頁より)

しかしながら、広島支部が東亜同文会会長・近衛篤磨より承認を与えられたのは1901年11月下旬でした。支部結成の動きが現れてから、かなり時間が経過したことが分かります。準備過程でさまざまな課題があったとも推察されますが、この間、1900年7月2日には中国新聞社の創業者・山本三朗が、支部設置の件で近衛と面会していることが『近衛篤磨日記』第3巻で確認できることから、山本が広島支部結成の中心的人物であったと考えられます。

承認が与えられたことにより、弘前支部(1901年1月)、京都支部(1901年5月)、青森支部(1901年11月上旬承認)に次ぐ形で、広島支部が正式に発足しました。

資料で確認できる限り、広島支部員数は1903年と1904年に33名を数えました。その後、会員数は減ってしまいましたが、1922(大正11)年時点でも弘前、京都とともに広島支部は存続していました。

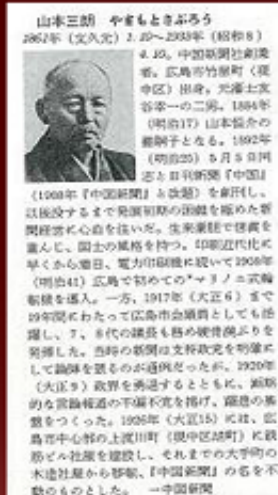
なお、広島支部結成前の1901年6月時点で、すでに東亜同文会会員になっていた広島県在住者として、以下の人々が『東亜同文会会則』から見出せます。

【広島市】

- ・山本三朗(1861～1933年)：中国新聞社を創業(1892年)。広島市会議員、県会議員も務める。
- ・早速整爾(1868～1926年)：県会議員(1896年)、衆議院議員(1902年)。大正末から昭和初期には農林大臣、大蔵大臣を歴任。
- ・中尾捨吉(1841～1904年)：判事として広島控訴院勤務を経て、弁護士。
- ・長屋謙二(1858～1913年)：中国新聞創刊に参画、第9代広島市長(1910～1913年)。
- ・小島範一郎(1852～?)：広島藩士の子。広島裁判所山口支庁で民事を担当(1877年)。
- ・瀬良隆蔵

【尾道市】

- ・橋本吉兵衛

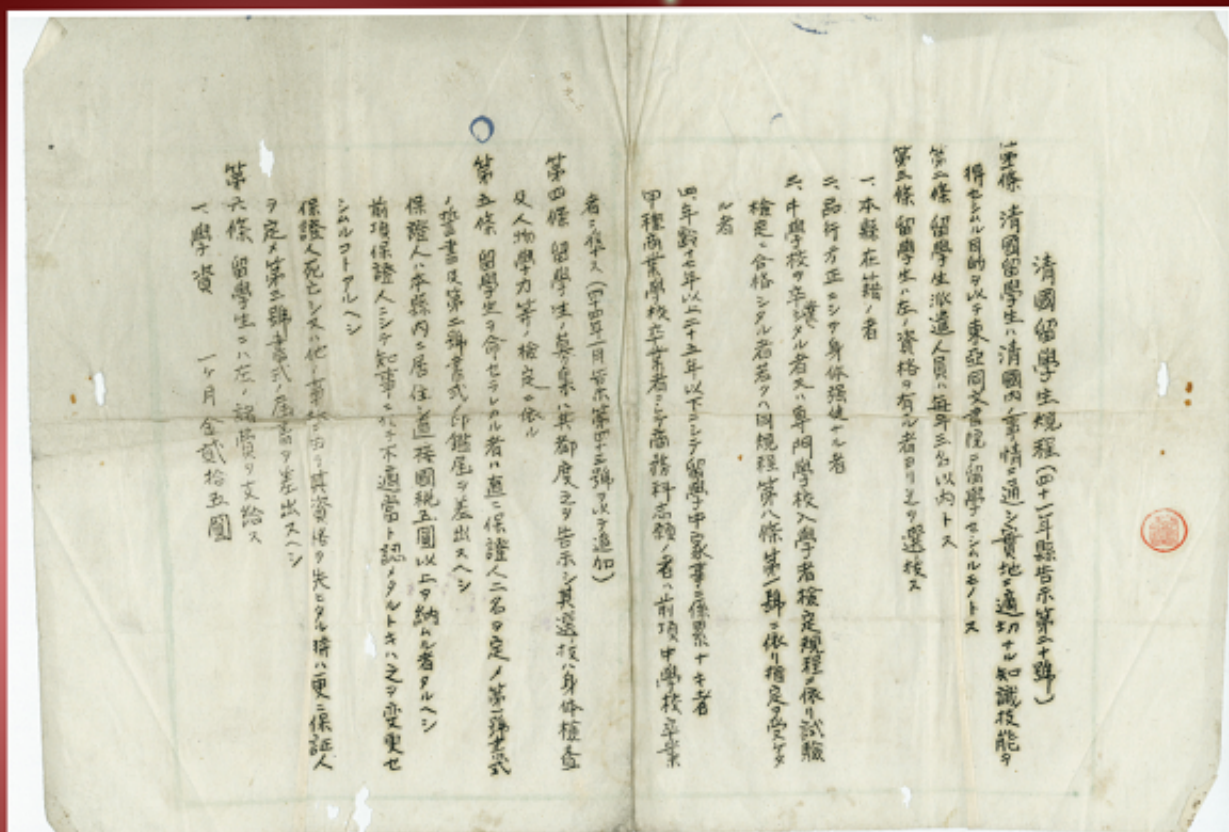


広島県の県費生派遣への 対応と認識

南京同文書院に広島県派遣生が学んでいたことは紹介しましたが、上海に移転し再出発した東亜同文書院にも、ご当地広島県から多くの学生が入学しました。その数は九州地域に次ぐ多さで、本州では最多です。

東亜同文書院への学生派遣を開始後、広島県は体制を整えました。1908（明治41）年には県告示第20号「清国留学生規程」を制定したことが確認できます。その規程には、県費派遣生の資格の1つとして広島県在籍者が挙げられており、派遣生を毎年3名派遣すること、そして派遣生に選ばれた者には学費1ヵ月25円、旅費30円、支度代30円を支給することなどが明記されています。また、派遣生は清国の商工業やその他に関し、調査した事項で必要と認めたときはその都度、知事に報告すべしとも定められていました。

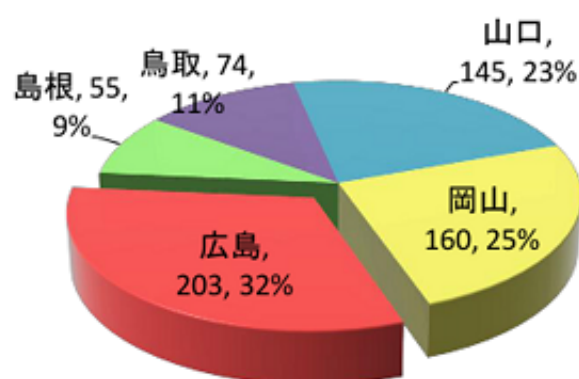
大正時代の記録によれば、広島県当局は東亜同文書院への県費派遣を育英事業として認識していたことが分かります。1919（大正8）年までに死亡者などもいたため卒業者は31名、就職先は自営業6名、官公署3名、銀行4名、会社12名、商店5名、教員1名であったと記されています。彼らの勤務地は中国17名（上海5、漢口2、天津1、蕪湖1、福州1、香港1、奉天2、大連1、旅順1、ハルビン2）、日本内地14名となっていました。卒業後多くの学生が中国で就職したという東亜同文書院生の進路の特徴が、ここからも確認することができます。



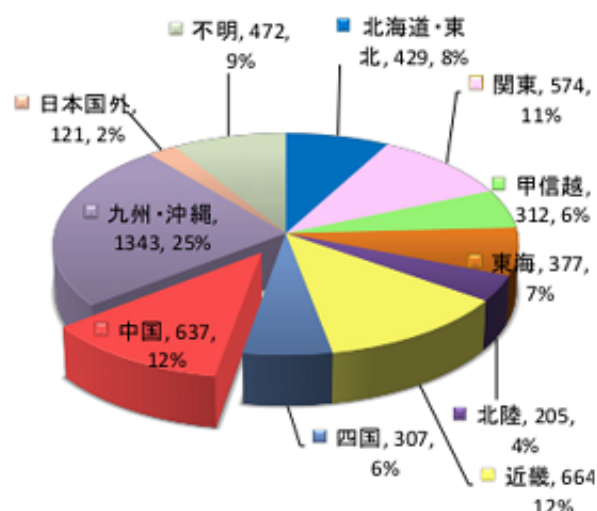
「清国留学生規程」（1908年）の一部（落久保博明氏寄贈）

広島県から 南京同文書院・東亜同文書院 に入学した学生の数

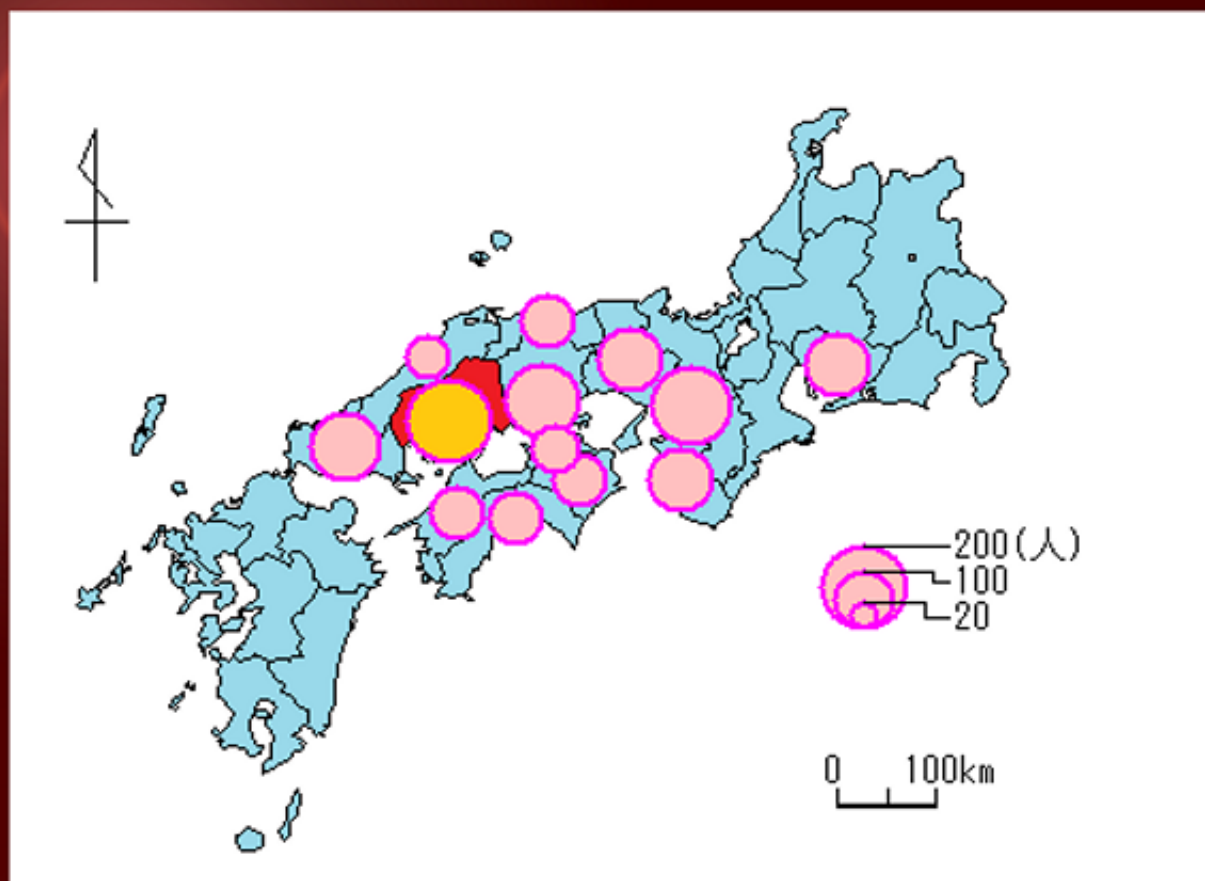
中国地方出身者別入学生数



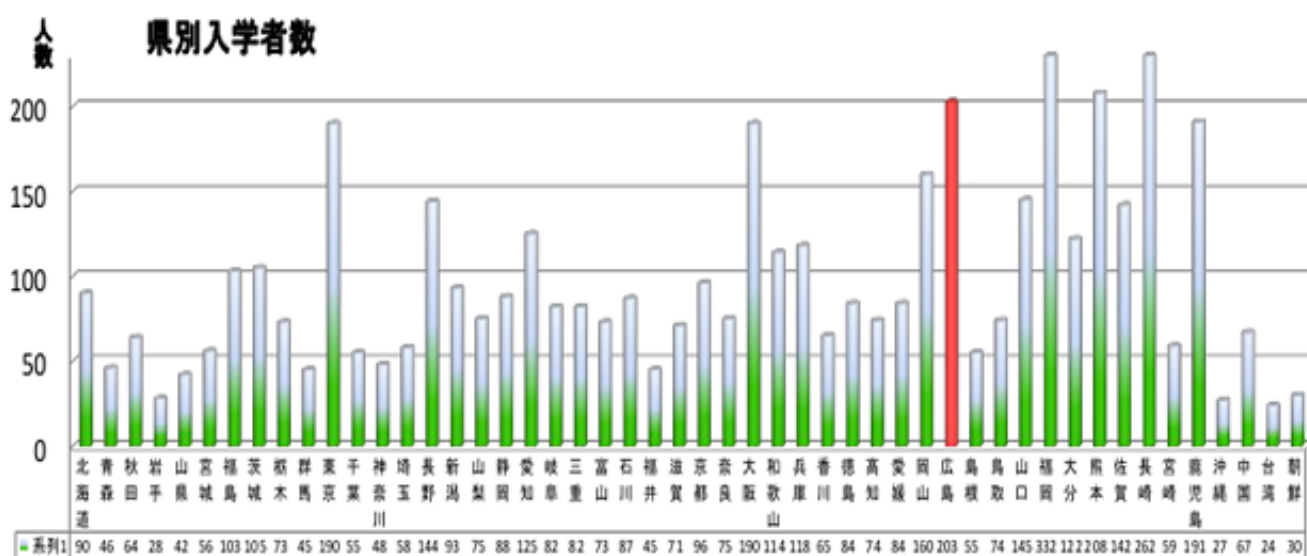
地域別入学生数



県別総数(人)		地域別総数(人)	
北海道	90	北海道・東北	429
青森	46		
秋田	64		
岩手	28		
山梨	42		
宮城	56	関東	574
福島	103		
茨城	105		
栃木	73		
群馬	45		
東京	190	甲信越	312
千葉	55		
神奈川	48		
埼玉	58	東海	377
長野	144		
新潟	93		
山梨	75	北陸	205
静岡	88		
愛知	125		
岐阜	82	近畿	664
三重	82		
富山	73		
石川	87		
福井	45		
滋賀	71	四国	307
京都	96		
奈良	75		
大阪	190		
和歌山	114		
兵庫	118	中国	637
香川	65		
徳島	84		
高知	74		
愛媛	84		
岡山	160	九州・沖縄	1343
広島	203		
島根	55		
鳥取	74		
山口	145		
福岡	332		
大分	122		
熊本	208		
佐賀	142	日本国外	121
長崎	262		
宮崎	59		
鹿児島	191		
沖縄	27		
中国	67	不明	472
台湾	24		
朝鮮	30	計	5441
不明	472		
計	5441		



中国地方および周辺県からの東亜同文書院入学生数



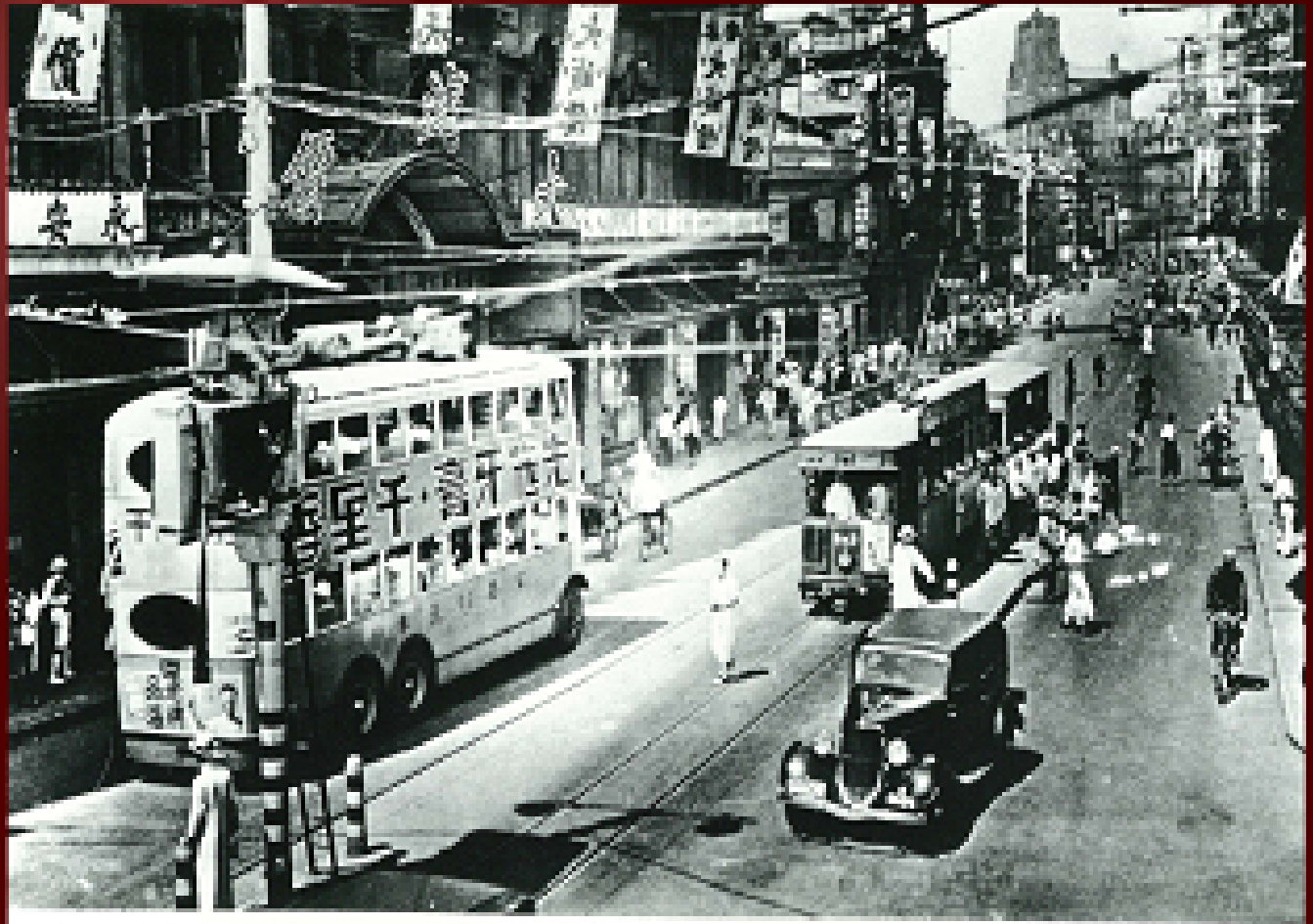
戦前の上海の様子



外灘



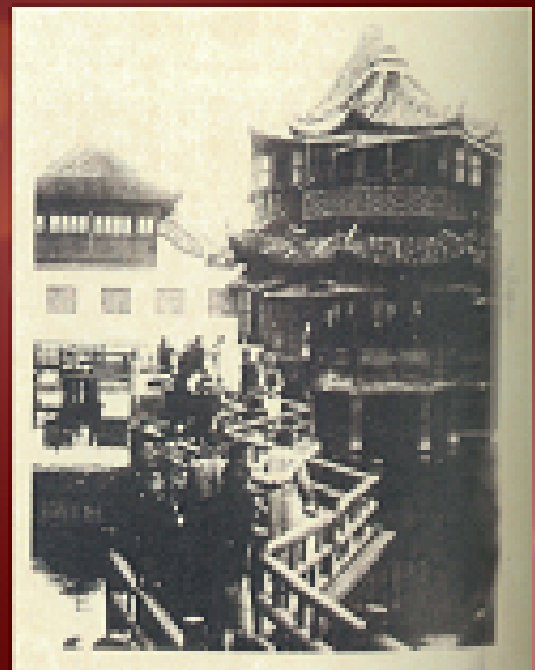
四馬路（26期）



南京路 黄色の二階バスと二輪連結の電車が共同租界のシンボル



南京路とインド人巡査



湖心亭

卒業生・関家三男氏の 回想新聞記事

わが友 わが母校

……(140)……

第一製紙所社長

関家 三男

私が上海の東亜同文書院に私費生として入学したのは昭和四年である。中国大陸にあるこの学校を選んだのは別に大陸に青雲の志を抱いて……というものはなかった。広島の高陵中学

(現広陵高校)のころ内地からの優秀な学生を勧誘するため日本全国を行脚中の書院井論部が広島にも立ち寄った際、井論部香川英史さん(トーマス)相談役)の話を聞いて受験すること

にきめた。

書院の学風、伝統は「同文同種の日華両国民は、まず親善をはかるべきであり、東洋問題を処理するのは東洋人でなければならぬ」という根津一先生の基本的考えを軸としていた。

したがって、この考えを實踐に移し得る人材を育てるのが書院で、ただ学問を教えるだけでなく、中国大陸で働く人づくりの道場といった感じがかった。この学風を慕って日本全国から優秀な人材が集まった。

学生は道府県が学費を出す県費生、外務省の留学生、満鉄をはじめ大新聞、大商社の委託生が大半を占め、私のような私費生は一割でいどであった。このため当時でも入試はかなりむずかしかった。

授業の内容は一般の大学と変わらないが、中国語、中国に関する学科に重点がおかれていた。もちろん中国人の先生も多く、中国語の授業など中国語以外使えなかった。

中国語で思いますが、院子(ゆあつ・校庭)は朝、夕ともなれば支那語の音声練習で鳥の



卒業前の大旅行の際、奉天の孔子廟の前で。左端が関家氏(円内も)

楽しい大陸卒業旅行

東亜同文書院

コーラスのよつだった。学生生活も、また内地の大学では味わえないほど大陸的なものであった。書院では旅費を出して二ヵ月

とくに全寮制であるため、先輩、後輩の関係が非常にはっきりして、規律がある半面、

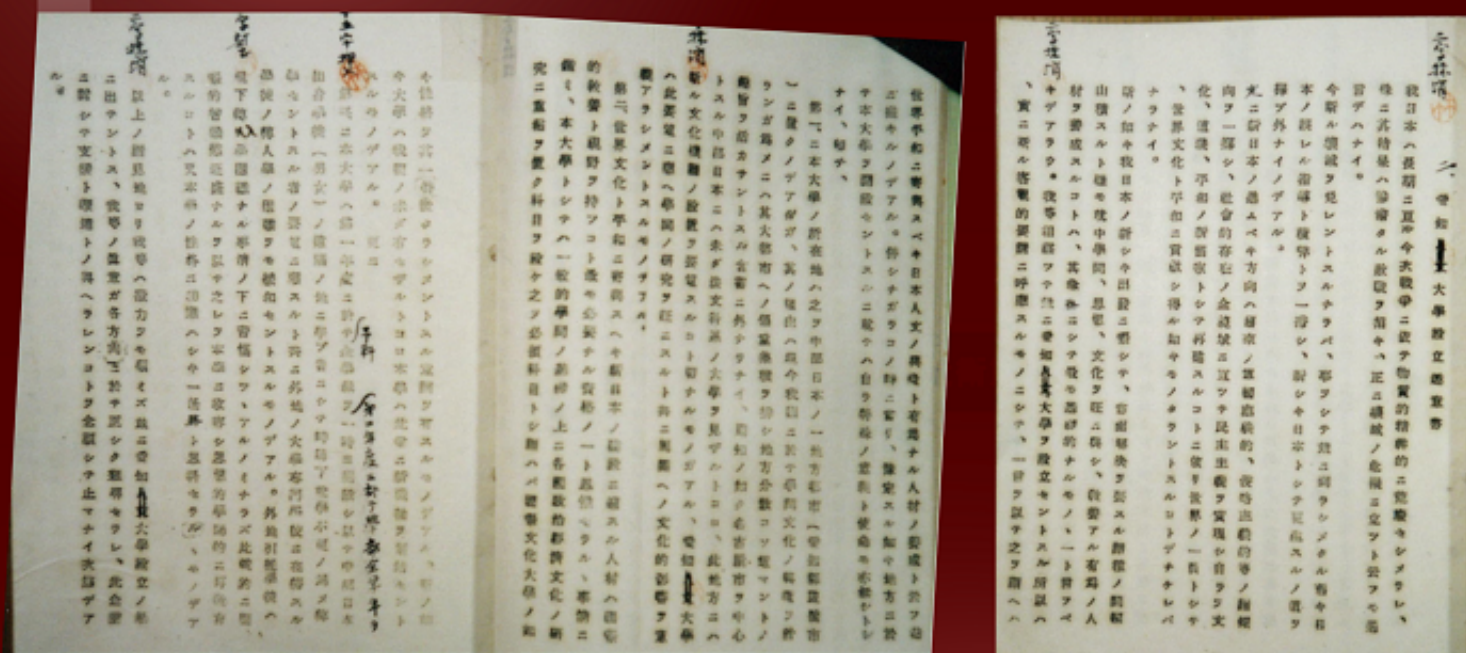
また書院生活で最も印象に残るのは卒業前の大旅行であった。書院では旅費を出して二ヵ月のグループ旅行をさせてくれた。この行事は明治四十年の夏、五期生から書院最後の年まで四十年間も続いた。大陸の大平原を歩き、揚子江を遊(さかのぼ)り、崑崙(こんろん)の山々を旅して政治、経済、文化を学んだ。私は北支、満州(現在の東北)をえらんだ。いまでもハルビンのロシア旅館で南京虫の大襲撃にあったことなどは忘れられない。

卒業生はほとんどが大陸の各分野で活躍したが、終戦で全員が裸同様に帰国した。今でも交友は続いている。各方面で活躍中の先輩、同期生は数多く、私の書院入学の「仲人」ともいえる四年先輩の香川英史さん、三年先輩で毎日新聞の社長をつとめ現在相談役の田中香南さん。

同期生では元パイロット万筆の副社長の土屋進、中国問題研究家の蔵居良造、台湾で貿易関係の仕事をしている長谷川稔の諸君、変わり種では毎日新聞時代エチオピア通で雄名をほせ、現在空調関係会社丸誠の社長庄子勇之助君など多士済々である。(東京都港区芝五二〇ノ一五)

在学中はむろんのこと学窓を離れても先輩は愛情を忘れず、後輩は敬意を失わず交友が深い。いまでも同期や同窓の集まりが定期的に催されるが、いわゆる「我々の老朋友(ぼくら親しい友達)」という実感がわいてく

グローバルな 姿勢の追求



創設にあたって文部省に提出した「愛知大学設立趣意書」

(口語訳を別コーナーで紹介しています)

東亜同文書院大学を受け継ぐべく、新たに国内に創られることになった大学は、終戦翌年の1946年に「縁あって」愛知県豊橋市にできることになりました。名称も「愛知大学」に決まりましたが、その由来は単に愛知県にできたことだけではなく、哲学用語の「愛知(=フィロソフィア)」、すなわち「知を愛する」の意味も込められました。そして創設当初の旧制愛知大学は、東亜同文書院をはじめとする80余の海外各大学から引き揚げてきた、いわば引揚げ総合大学として、書院を中心に全国区型で開学することになりました。

このような経緯で設立された愛知大学の建学目的は「設立趣意書」として、

- ① 世界文化と平和への貢献
- ② 国際的教養と視野をもった人材の育成
- ③ 地域社会への貢献

を掲げました。これらは敗戦直後にもかかわらず、他大学にはない「グローバル」なものでありました。これも世界平和をふまえ、書院の継承を示しているといえます。

現在、文・法・経済・経営の伝統的学部に加え、日本で初、唯一の「現代中国学部」のほか、「国際コミュニケーション学部」「地域政策学部」は、まさにこのグローバルな書院精神を引き継いだものといえます。

全国には同窓会支部が設置され、広島支部も現在178名が在籍し、「地域社会への貢献」を果たしています。

東亜同文書院・愛知大学双方で 教鞭をとった広島県出身の各教員



←若江得行（わかえ とくゆき）

↓愛知大学公館
（1912年建築、現在使用休止）



1910年福山市生まれ。東京帝国大学卒業、英語担当教員で、人文地理学も教授した。愛知大学創設期に教員宿舎に使われていた公館（旧陸軍第十五師団長官舎、写真左）が、1950年の朝鮮戦争勃発にともない占領軍に接収される危機が生じたことに際して、小岩井浄教授（のち学長）夫人の多嘉子女史（婦人運動家）がマッカーサー元帥夫人にあてて記した書簡を英訳。英文力が元帥の副官より高い評価をえて、公館接収が回避された。



← 斎伯 守（さいき まもる）

↓ 東亜同文書院大学呉羽分校の建物
（呉羽航空機株式会社より借用。
写真は1991年撮影、現存せず）



1897年御調郡向島西村（現 尾道市）生まれ。大東文化学院高等科卒業、漢文学教員。東亜同文書院大学が終戦直前に設営した呉羽分校（富山県、写真下）の校長を務め、敗戦後の混乱には、本間喜一学長らの帰国を待ちつつ対処。分校閉鎖後は一時故郷に戻るも、帰国を果たした本間らが創設した愛知大学に請われて参加。1949年に病没したが、実娘がその後同大学に職員として長らく勤務した。